デュッセルドルフ日本人学校における国際親善・交流活動の実際

前デュッセルドルフ日本人学校教諭
宮崎県宮崎市立宮崎西中学校教諭　田詰　博美

キーワード：在外教育施設、ドイツ、現地理解教育、国際理解教育、国際交流活動

１．　はじめに

ドイツ中西部にあるデュッセルドルフ市。ノルトライン＝ヴェストファーレン州の州都であり、ルール工業地帯の交通拠点であるこの地には約540社の日本企業が拠点を構え、およそ6500人の日本人が居住している。日本人の数はヨーロッパで3番目に多い国である。毎年5月に開催される欧州最大規模の「Japan-Tag（日本デー）」には、国内外から60万とも70万ともいわれる多くの人々が集い、日本のアニメやコスプレ、日本文化や日本食を楽しむことができる。毎年、デュッセルドルフ日本人学校の児童生徒は、ウィンドアンサンブル部や合唱部、和太鼓の演奏、また、国際交流委員会を中心に折り紙ワークショップで祭典を盛り上げている。

本校は小中併設校で、約470名の児童生徒が登校しており、毎週土曜日には約200名の補習校の児童生徒が日本語を学びにやってくる。ドイツ語や英語教育を充実させた国際理解教育、姉妹校や現地校との交流等、ドイツにあることの特性を生かした教育活動を行っている。児童生徒が本校での豊かな海外経験を通して、将来、日本とドイツをはじめ外国とのかけ橋になってくれることを願い、本校の国際親善・交流活動の実際を紹介する。

２．実践の方針

日本人学校の使命は、海外で生活する日本人の児童生徒に対し、日本国内と同等以上の教育を行うことのほかに、将来、児童生徒が世界で活躍する上で、日本国民としての自覚と国際性を身につけられるような教育を行うことである。このことに加え、デュッセルドルフ日本人学校は、ドイツ社会の中で生活していることの特性を生かし、現地社会との親善活動や交流活動を積極的に取り入れ、児童生徒の国際性を高めることを重要な課題としている。

我が校は、学校教育目標「豊かな心をもち、国際感覚を身につけ、学び続ける子どもの育成」のもと、めざす学校像を「ドイツにあることの特性を十分生かした学校」とし教育活動を行っている。

そこで、(1)校務分掌に位置付けられた国際教育部の音楽交流や文化交流、(2)小学部3年生の社会科や総合的な学習の時間、音楽を通して、我が校の国際教育のあり方を学び、国際性を身につけようとする児童生徒がどのように育成されていくのか、また、これまでの活動がどのように維持・継続されてきたのかについて実践、考察を行った。

３．実践内容

(1) 校務分掌（国際教育部：音楽交流、文化交流）

① 音楽交流（合唱クラブ）

㋐ 実践例1：2017年10月　Marie-Astrid（マリーアストリッド）王妃合唱団との交流

ルクセンブルクの合唱団‘Marie-Astrid（マリーアストリッド）王妃記念合唱団’と現地でコンサートをした。同合唱団と本校は、1978 年から友好関係を結び互いの地を訪れ音楽会を行い、交流を深めている。日本語、ルクセンブルク語での合同演奏もあり会場が笑顔で満たされた。また、ホームステイではジェスチャーや英語、ルクセンブルク語を交えてホストファミリーとの会話を楽しみ、文化を知る良い機会となった。

ルクセンブルクでのコンサート

㋑　実践例 2：2018 年 2 月　子どものためのホスピス支援・慈善コンサート

デュッセルドルフ市内にある「子どものためのホスピス」支援チャリティーコンサートが Gerhart Hauptmann 財団ホールで行われ、本校合唱クラブと音楽科の星野教諭、若林教諭が出演した。

コンサート終了後、合唱クラブは募金活動を行い、毎年多額の募金を集めている。

②　文化交流

㋒　実践例 3：2017 年 7 月　側転小僧大会

2017 年、第 68 回側転小僧大会がライン川河畔で行われた。晴天に恵まれ、現地校の児童も含め 466 名が会場に詰めかけた。本校からは 40 名の児童（小 3～小 6）が参加した。男女・年齢別のグループで速さを競う「スピード部門」や側転の美しさが決め手となる「スタイル部門」など 4 競技が実施された。練習の成果もあり多くの児童が予選を通過し、5 名が入賞した。日本人学校は 2011 年と 2015 年に続き 3 回目の学校賞を獲得した。

㋓　実践例 4：2019 年 12 月　ツェツィーリエン・ギムナジウムのオープンスクール

現地校のオープンスクールに中学部の生徒と職員が参加した。日本人学校のブースでは、日本の昔遊びや折り紙、書道コーナー等を設け、ギムナジウムの生徒や来場者の方々と交流することができた。また、普段授業で教わっている英語やドイツ語を活用する機会となった。

③　考察

・ドイツの地で生活していることを楽しんでいる反面、地域社会や異文化、ドイツや他国の人々に進んで関わりをもとうとする児童生徒は多いとは言えない。

・自分たちが日本人として果たす役割や様々な活動が、地域社会に大きく貢献しているという自覚をもって交流活動に参加している。

・国際交流活動は本校の特色であるため、現地採用教員や学校事務長をはじめ多くの方々が今日まで交流活動を支えてくださっている。

(2) 小学部 3 年生（社会科、総合的な学習の時間、音楽）

①ドイツ社会から学ぶ学校

㋐　実践例 1：2018 年 12 月　ヴァイナハツマルクト合唱

メアブッシュ市庁舎前で行われるヴァイナハツマルクト合唱に小学部 3 年生、54 名の児童が参加した。緊張の面持ちで「もみの木」と「クリング・グレックヒェン・クリング」を合唱し、「あの雲のように」と「山の上のポルカ」をリコーダーで演奏した。演奏会を見ていたドイツ人の方々から、「歌声がかわいい。」「ドイツ語のあいさつが上手ですね」といった声援を受けながら、最後に「ディン・ドン・メリーリィ・オン・ハイ」と「アーレ・ヤーレ・ヴィーダ」の歌をハンドベルやトライアングル、鈴の演奏を加え披露した。自分たちの歌声がドイツのクリスマスに花を添えられたことがうれしく、演奏後たくさんの笑顔であふれていた。このよ

うな経験は、児童にとってドイツの文化に触れる絶好の機会であり励みとなった。

㋑　実践例２：2019 年 11 月　TEEKANNE 紅茶工場見学

社会科「工場の仕事」の学習で、TEEKANNE 紅茶工場を見学した。TEEKANNE は世界初のティーバッグ製造機械を発明した会社である。まず、紅茶とお菓子をいただきながら映像を視聴し、紅茶と工場の歴史から現在にいたるまでを学習した。児童はドイツ語にも関わらず熱心にメモをとったり、質問したりする姿が見られた。その後、生産ラインに行き、紅茶を製造する機械や工程を見学した。ティーバッグが箱詰めされるまでのスピードに児童から大きな歓喜があがった。

②　国際交流に積極的な学校

㋒　実践例３：2019 年７月　マウリツィウス小学校、ブリューダグリム小学校との太鼓交流

小学部 3 年生は学校祭で和太鼓演奏をするため、総合的な学習の一貫として年度当初から和太鼓について学習し熱心に練習に励む。一方、現地の小学校ではアフリカの太鼓を学習に取り入れている。まず始めに、現地校にお願いし、アフリカの太鼓の学習に参加させてもらい、太鼓を打つ楽しさを知りリズム感を養う体験をする。児童は、ドイツの児童がダイナミックに太鼓を打つ姿に圧倒されながらも見様見真似で打つ。次第に「楽しい！」「もっと打てるようになりたい」という思いの中、太鼓を通して両国の児童の交流が始まった。最後は「今度は、私たちが和太鼓を教えるね」と約束を交わし、10 月の学校祭、そして、その後の交流学習へのモチベーションを高めていった。

㋓　実践例４：2019 年 10 月　マウリツィウス小学校、ブリューダグリム小学校との国際交流

学校祭開催後、10 月中旬頃に現地の小学校の児童と交流をした。テーマは、1「和太鼓を伝える」2「友だちを作る」3「日本文化を伝える」で、それぞれが役割と責任をもち準備を進めた。交流当日は学習したドイツ語を使ってあいさつしたり、太鼓や日本の昔遊びを教えたりした。初めは恥ずかしがっていた児童も身振り手振りで教え合っているうちに仲良くなり、楽しい時間を共有することができた。

グループに分かれて和太鼓を伝える児童

③　考察

・現地校との交流や工場等の訪問は、ドイツでしか味わえない経験であり児童にとって大変有意義な時間であった。

・家庭環境や教育システムの違いにより、現地校の児童が休み時間におやつを食べていることや携帯電話を使用していることに対して、日本人学校としての対応（本校の児童への説明や先方に日本人学校の習慣を理解してもらうこと）が必要であった。

・与えられた課題に対して準備や練習に意欲的に取り組む。しかし、自ら課題を見つけ、自分の意見を述べたり、自分なりの方法で交流活動を進めたりする力が不足している。

４．おわりに

「『デュッセルドルフ日本人学校の児童生徒は、小さな外交官ですね』と以前合唱クラブが出演した演奏会後、聴衆の１人であった年配のドイツ人の方から声をかけられた」という話を赴任１年目に聞いた。それから３年間、合唱クラブや交流委員会と共に親善活動や国際交流をしてきて、子どもたちの様々な活動や働きかけが人々に感動を与え、人と人との心を結びつけるものであることを実感した。

また、小学部３年生の社会科や総合的な学習の時間等で、毎年現地校との交流や工場訪問などの依頼をすると、「デュッセルドルフ日本人学校の児童生徒ならお引き受けしましょう」と快く承諾していただいている。これは、

日本人、そして、日本の教育がドイツ社会に受け入れられていることだと考える。私たちがこのような環境下で学習活動ができることに深く感謝するとともに、日本人としての誇りを感じる。

児童生徒はドイツ社会や文化、人々と関わる際、与えられた役割を懸命に果たそうとする。そして、様々な活動や働きかけをしていく中で、人々に喜びを与えられることを感じとる。さらに、ドイツの人々の笑顔が児童生徒の励みとなり、次への活力へなっているのである。

一方、私たち教員の役割は、児童生徒が人と関わりたいという気持ちを育て、ドイツ社会がもたらす雰囲気の中で、他人との出会いや新しい自分を探求させることである。また、興味や関心を引き出し、驚きや感動を味わわせることが重要である。なぜなら、児童生徒が驚きや感動を味わった瞬間に、その対象をもっと知りたい、もっとつながりたいと求めるようになるからである。

デュッセルドルフ日本人学校の国際交流活動が長きに渡り伝統として受け継がれ、新たな 1 ページとして加えられていく。その過程に携わっていけたことに私自身大きな喜びを感じた。